

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に
共感と敬意を込めて撮影している。



竹富島出身の東里育^{あいきと}さんは、戦時中 15、6歳の頃に姉をたよって台湾に疎開していた。疎開先で、空襲から逃れるために防空壕に避難していた時に、近所の人が空襲で命を落としたことを話してくれた。

「血だらだらしてよ、もうこんな見きらんからさ、怖ろしくてね。かわいそうだったさ」

終戦後は、船に乗って竹富島に帰り着いたが、小さな竹富島は多くの人で溢れていたため、食料や水の確保に苦労した。「食べるものがないから、芋の皮を干してから、これを食べたりしたこともあったよ。苦労したさ。井戸も枯れてね、水が湧くまで並んで順番待ちしたよ。髪なんて何日も洗えないときもあって、大変だったさ」

育さんは、同じ島で育った一つ上の学年の悟(さとる)さんと 22歳の時に結婚した。3人の子どもに恵まれ、長男が小学校に上がる頃に石垣島へと移り住んだ。

「今まで兄弟みたいに付き合っていたのに、夫婦になるわけ？」なんて言っただけ、と朗らかに笑いながら話す育さんの口調には、悟さんへの愛情がこもっているのが感じられた。横に座っていた孫の明斗^{あきと}さんが、「ばあちゃんは、じいちゃんのこと大好きだったからさ、じいちゃんが亡くなった後一年ぐらいは泣いてたよね」と2人の仲の良さを話してくれた。

おもしろいことが好きで、人を笑わせることに長けていた悟さんは、人から誘いの電話がかかってくるのが絶えなかったそうだ。「あんまり人を笑わすから、葬式には来るなと言われたことがあった」と話す育さんの目尻に刻まれた笑い皺には、食べることも大変だった頃のことや、空襲で命の危機を感じる体験をしたことや、「もう二度とあんな苦労はしたくない」とつぶやいてしまうような全ての苦労までもを上書きしてしまうような、「強さ」が宿っていた。

育さんは今 96歳で独り住まいだ。帰り際にのぞいたキッチンは、すっきりと綺麗に片づけられていて、その情景から不思議と勇気にも似た感情が湧いてきた。

水野暁子 みずのあきこ
1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。
- フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右 QR コードホームページの Contact から。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー